

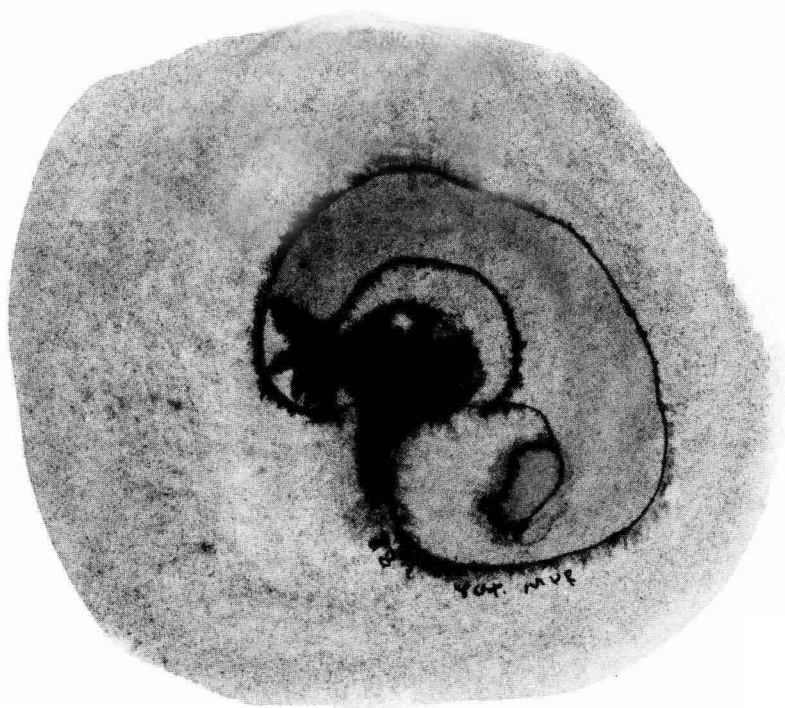
色川武大

離婚



離婚

色川武大



文藝春秋

色川武大（いろかわ たけひろ）

昭和4年、東京に生まる。東京市立第三中学校中退。36年、「黒い布」で中央公論新人賞受賞。52年、『怪しい来客簿』（話の特集刊）で泉鏡花賞受賞。53年、「離婚」で第79回直木賞受賞。また阿佐田哲也の筆名で『麻雀放浪記』など著書多数。

離婚

和五十二年十一月三十日 第一刷

定価 七五〇円

著者 色川武大

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

離婚	5
四人	51
妻の嫁入り	113
少女たち	169

写真 装帧
山川進治 村上 豊

離

婚

離 婚

私たちは再々にわたる協議の末、このたび、めでたく、離婚いたしました。

羽鳥 誠一

会津すみ子

そういう通知を友人知己にばらまいたわけではありません。シャレに離婚をしたつもりもないし、こういう結果を見るにいたるまでには、ともかくかなり長い道程をへてきたわけでして、だから、競馬の当りはずれや、水洗便所のコックがこわれて水が便所の中に満ち溢れたなどという困惑よりは、もちろん、ずっと大きな問題であります。

かといって、一生の中の大事件扱いをして、泣いたり叫んだりする性質のものでもないように

思えます。

「ことさら深刻ぶるのはよそうぜ」

ぼくは、そういいました。

「要するに、我々が結婚生活を営む値うちがないということなんだ。値うちのない者が、自分の値うちに応じた暮し方をしようということなんだから」

「そうね」

とそのときは、彼女も固い表情でそう応じました。しかし内心では、男ゆえの身勝手なセリフと受けとっていたかもしれません。

そもそも、子供でもあったら、きつとまた問題の中味がかわっていたでしょう。ぼくたちは、幸か不幸か、子供をつくりませんでしたから、まだそれほど年齢を喰ってない夫婦が初志をかえて二人べつべつに暮していく、或いは、いかざるをえないということだけのことで、結婚したときとおなじく、成人した人間がそれぞれの責任でことを処していけばいいように思われます。いや、そうするほかにいたしかたがないということでもありません。ですから、吹聴もしないし、秘密にしておけることでもなく、親しい人たちにはその事実をそれとなく告げ、彼等是我々の真意をはかりかねて、遠巻きに眺めている様子でした。

もともとぼくたちは、その端緒の段階で、誰に相談したわけでもなく、仲人ひとつたてること

もせず、二人だけで話し合っただけで暮らしたのです。完全な、くっつきあいでありました。結婚式もなにもしてありません。だいいち、当初はただの野合同棲で、特別に長続きしようとか、させようとか、思っていなかったのです。

ぼくは学校を出て、一応ジャーナリスト志望だったけれど、在学中アルバイトで某ライターの取材を手伝ったことがあり、見よう見真似が縁で（というより大手出版社に入社することが果せなかったせいでもあります）宮仕えより名ばかりでもフリーの方がかっこいいような気がしはじめて、フリーの取材記者の世界に入りました。もちろんマイナーの週刊誌で最初は嘱託の記者見習いです。嘱託というときこえがいいけれど、要するに臨時工です。近頃は組合があつて、その出版企画が失敗し廃刊する場合も人員整理がでにくいところから、社員外の人間を好んで使う傾向があるのです。そんな中で五、六年働いているうちに、まアなんとか自分の書いた記事が通用するようになり、先の見通しも病氣怪我のときの保証もないけれど、とりあえず今日は喰っていけるようになりました。

その世界にまだ入りたての頃、ぼくのせまい下宿にも何人かの女友だちが出入りして、諸事不潔な身の廻りの世話を焼いてくれたり、当時のぼくの日常の色どりになっていたわけですが、すみ子もその中の一人だったのです。そのうちぼくは、若くてお面も身体もよかった彼女を人一倍かわいがるようになりました。外を連れ歩くのにふさわしかったせいもあるし、その頃のぼくが、

身近に華やいだものを求めていた、その気分のせいもあるでしょう。

彼女はのっけから相当にかわった娘で、一番最初知りあったとき、

「ねえ、あたし、お妾にしてくんない」

そういうたのです。もちろんそれは親しい連中で車座になって呑んでいたときで、かなりリラックスした空気にはなっていました。が、ちゃんとした親もとに居り、水商売に染った噂もきかないのに、かわった冗談をいう子だと思いました。けれども、そのあと、部屋で二人でいるときも、同じようなことをいうのです。

「あたし、お妾になりたいわ。それが一番いいと思うの」

「何故」

「だって、女房って、面白くなさそうだわ。あたしには合っていない」

「妾なら、合ってると思うのか」

「責任がないもの。楽そうだし。——あんたならいいわよ。お妾にしてよ。あたし、親のところ
に居たくないのよ。妹も、結婚相手がきまっちゃったみたいだし」

「しかし、俺は、一応独身だぜ」

「独身だと、お妾は駄目なの」

「ううん、どうだかな。君を妾にして、妾宅をかまえると、俺はときどき本宅へ帰らなくちゃ

ならない。しかしその場合、本宅というのは意味ないな。——妾じゃなくて、本妻でもなく、単なる同棲じゃいけないのか。お互い、あきたら別れるという」

「それじゃ本妻と同じじゃないの。あたし、あんたの世話なんか見られないわよ」

「妾なら、世話しなくてもいいわけか」

「たまならないわよ。生活費と寐る場所をつくってくれば。——でも、誤解しないでね、誰にでもこんなこといつてるわけじゃないのよ。あたしって贅沢なんだから」

妾の暮しが本来どういうものか、見て知っているわけでもないらしいこの娘の、どうも知能おくれみたいな発言をぼくは内心笑っていました。同時に、この娘とその後六年も暮すことになるとは露知らず、フラッパーな魅力のようにも思っていました。

けれども、考えてみれば、無責任で楽そうだからいいという彼女のいいぶんは、ぼくが今の職業をえらぶときの気持と五十歩百歩のもので、自分のそういうところを忘れて、なんで彼女を笑うことができましょう。ぼく自身が、いいかげんに、身勝手に、無節操に、それこそ妾のように計算ずくで世の中に対しているのに、パートナーには本妻的なものを要求するのは、高望みなものではありますまいか。

彼女は、ぼくより先に、本能的にそういうものを感じていたのでしょう。

「誠ちゃんとあたしは、同類項ね」

「そうか、そういうものかもしれないな」

「誰かに愛されるような人間じゃないわ。そんな値打ちはないのよ。だから、誠ちゃんと居ると、気楽なんだわ」

「そんなものかな」

「誠ちゃんは、誰かを愛したことがある」

「愛とか恋とか、女はそんなことばかりいうからいやだなァ」

「あるの」

「つきあった女はいろいろいるがね。厳密にいうと、どうかなァ」

「そうでしょ。そうだと思っただわ」

ぼくが彼女をかわいがったと同じくらい、或いはそれ以上に、彼女も出入りする他の娘たちを意識してぼくの視線を自分に固定させようとしていました。それは女の本性ともいえるでしょう。そればかりでなく、積極的に他の娘をぼくから遠ざけようとしていたふしも見られます。というのは、彼女と親たちがひどく折り合いが悪くなっていたらしく、なんとかして親もとを飛びだそうとしていたようなのです。ぼくはその原因をあえて問いつめず、彼女のわがままさゆえと思っていました。父親に殴られるのだ、と彼女はくりかえしているのです。

「死ぬほど殴るのよ。殴られるのは絶対にいや。誠ちゃんは暴力をふるいそうに見えないもの

ね」

「そうとも限らんぜ」

「じゃ、殴るの」

「場合によっては、だろうな」

「いやよ、そんなだったらもう来ないわよ」

「まあ、比較的、手を出さない方だろうな、俺はそんなに情熱的じゃない」

「ぼくの下宿の隅っこにおいてあったデッキチェアの上で、彼女と関係ができてしまった夜、

「あたしを、ここにおいてよ」と彼女はいました。「もう家に帰らないわよ」

「うむ、——居たかったら、居ろよ」

「誠ちゃん、あたし、好き？」

「——そうだな」

「好きとはいえないでしょう。ただちょいつまみ喰いをしたつもりでしょう。いろんな人がそういうわ、あたしは遊び女だって」

「うん——」

女を手もとにおいておくのも悪くはない、とぼくは思いました。彼女が遊び女タイプだったとしても、誘導の仕方によって一緒に暮す女になりうるのではないかと思いました。そう思ったか

ったともいえましょう。ぼくは孤独だったのです。いいかげんに日を送って、小いそがしく働いたり遊んだりはしていましたが、それでも、淋しく、諸事、心が隠していました。

が、このへんの言葉のかわし方については彼女の主観と喰いちがっているでしょう。ぼくが積極的にいい寄ったと彼女は口に出しているばかりでなく、本気でそう思っているようですし、またまぎらわしいことに、その頃の睦言^{むつご}で一再ならず、ぼくの方からそうしたことを口走っているのです。——君が好きだよ。三十年俺はそんなことを口にしたことはないが、君と一緒に暮しいと思っっているよ。

「いいの——？」

そのたびに彼女は挑発するようにいました。

「あたしはかわいくない女よ。暮すタイプじゃないのよ。かわいくなろうとも思っ^よてやしないわ

「しかし、君もここに居たいんだろう」

「——じゃあ、暮す？」

「ああ——」

「あたしを守ってくれる」

「——君を失望させないつもりだよ」